

総合計画・総合戦略策定における 地域幸福度（Well-Being）指標の活用について

内容

1. まちづくりにおける Well-Being-Based Policy Design (WBPD)	2
1.1. 背景	2
1.2. Well-Being-Based Policy Design (WBPD) とは	2
1.3. 総合計画・総合戦略策定における活用	4
2. 地域幸福度（Well-Being）指標とは	5
2.1. 地域幸福度（Well-Being）指標とは	5
2.2. 開発・導入の目的	6
2.3. 主観指標と客観指標	6
2.4. 主観指標アンケート調査と結果の可視化	8
2.5. ワークショップ	9
3. Well-Being アンケート調査結果	10
3.1. 調査概要	10
3.2. 属性	10
3.3. 幸福度・満足度	11
3.4. カテゴリー別（レーダーチャート・散布図）	11
3.5. 幸福度・生活満足度と因子との相関関係	13

1. まちづくりにおける Well-Being-Based Policy Design (WBPD)

1.1. 背景

- ・ 現在の日本は大きな変化の中にあり、少子高齢化や人口減少が進み、ポストコロナ対応や自然災害の激化といった課題が顕在化しています。また、市民の価値観も多様化し、物質的な豊かさだけでなく、精神的な幸福や安心を求める人が増えています。
- ・ また、自治体は限られた予算や人材を効果的に使うため、データや合理的根拠（エビデンス）に基づいて課題の優先順位を決めることが大切です。これは「Evidence-Based Policy Making（証拠に基づく政策立案：EBPM）」と呼ばれる手法で、単なる経験やエピソードに頼らず、データで効果的な政策を選ぶアプローチです。
- ・ GDP のような単一の指標では、市民の幸福感や生活満足度を見逃してしまうため、市民の声をデータで集め、多様な価値観を反映した政策設計が求められています。

1.2. Well-Being-Based Policy Design (WBPD) とは

- ・ 「Well-Being-Based Policy Design（ウェルビーイングに基づく政策設計：WBPD）」は、市民の幸福感や暮らしやすさを高めることを目指す政策立案手法です。
- ・ 「一般社団法人スマートシティ・インスティテュート・ジャパン（SCI-Japan）」※が推進するこの考え方は、経済成長だけでなく、健康、教育、環境、社会的つながりなど、市民のウェルビーイングを多面的に高める政策を設計します。
- ・ 「Well-Being（ウェルビーイング）」とは、身体的・精神的・社会的に良好な状態のことで、WHO などの国際的な枠組みを基にしています。

■ 世界的に認知された以下のふたつの考え方を地域幸福度(Well-Being)指標の基本概念としています。

ウェルビーイング（Well-being）

=「身体的・精神的・社会的に良好な状態にあること」

- 「健康とは、病気ではないとか、弱っていないというわけではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべて満たされた状態（Well-being）にあること」（WHO）

健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health）

=「個人または集団の健康状態に違いをもたらす経済的、社会的状況のこと」

- WHOソリッドファクト（2003年）に列挙された健康の社会的決定要因：社会格差、ストレス、幼児期、社会的排除、労働、失業、社会的支援、薬物依存、食品、交通
- 社会的決定要因とは、人間の健康には人間内面（身体・精神・社会）のみならず、外部環境も影響を与えているとする

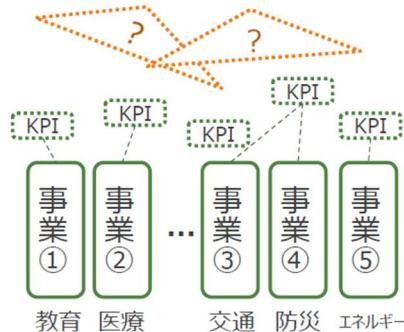
出典：「地域幸福度（Well-being）指標利活用ガイドブック」
（2024年6月 デジタル庁・一般社団法人スマートシティ・インスティテュート）

図 1-1 Well-Being（ウェルビーイング）の基本概念

- ・ EBPM はデータや合理的根拠で政策を設計する手法で、WBPD はこの EBPM を基盤に、ウェルビーイングに特化したアプローチを取ります。
- ・ また、従来のまちづくりでは、目指す価値観や取組の連携が不十分でしたが、WBPD は指標を活用して価値観をすり合わせ、施策の連携をスムーズにします。

現状

- 複数事業を包括する街全体の目指す価値観の明示が不十分。各事業が目指すまちづくりの目的や取組もバラバラ。
- KPIの設定も事業毎に独自に設定されており、相互の連関性は低い。



今後

- Well-Being指標を活用することにより、地域全体の目指したい姿の検討がより具体化。
- 共通の指標をKPIとして持つことで、地域の様々なプレイヤーが自分たちの活動を評価しやすくなる。

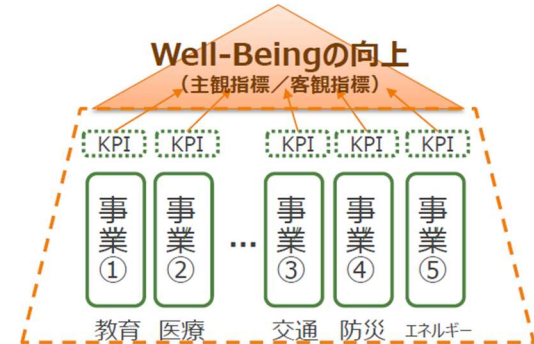


図 1-2 まちづくりにおける Well-Being 指標の活用

（出典：地域幸福度（Well-being）指標の活用について（2024 年 10 月 デジタル庁 地域幸福度（Well-Being）指標活用説明会）

■ WBPD のプロセス

Well-Being の向上という最終ゴールから逆算する形で、KPI、施策を考え（仮説を立て）、そのうえで、政策を実行し、その効果を検証するという PDCA を回すことが重要です。

- ・現状認識 Well-Being 指標の主観アンケートから、市民の幸福感や生活満足度に影響する地域の課題（例：公共交通での移動が不便）を特定
- ・指標設定 重要な課題に客観指標（KPI）を設定
（例：駅・バス停留所徒歩圏人口カバー率）
- ・政策設計 客観指標（KPI）の目標値達成を目指す政策デザイン・介入を行う
（例：コミュニティバスの増便とルート拡大）
- ・実行と評価 施策を実施し、ウェルビーイングの向上をデータで確認

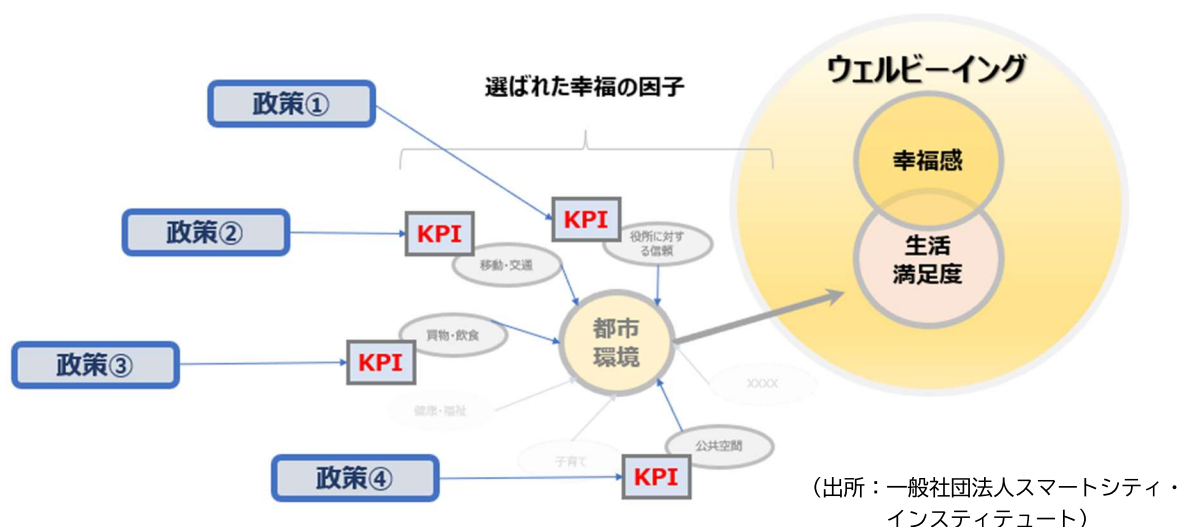
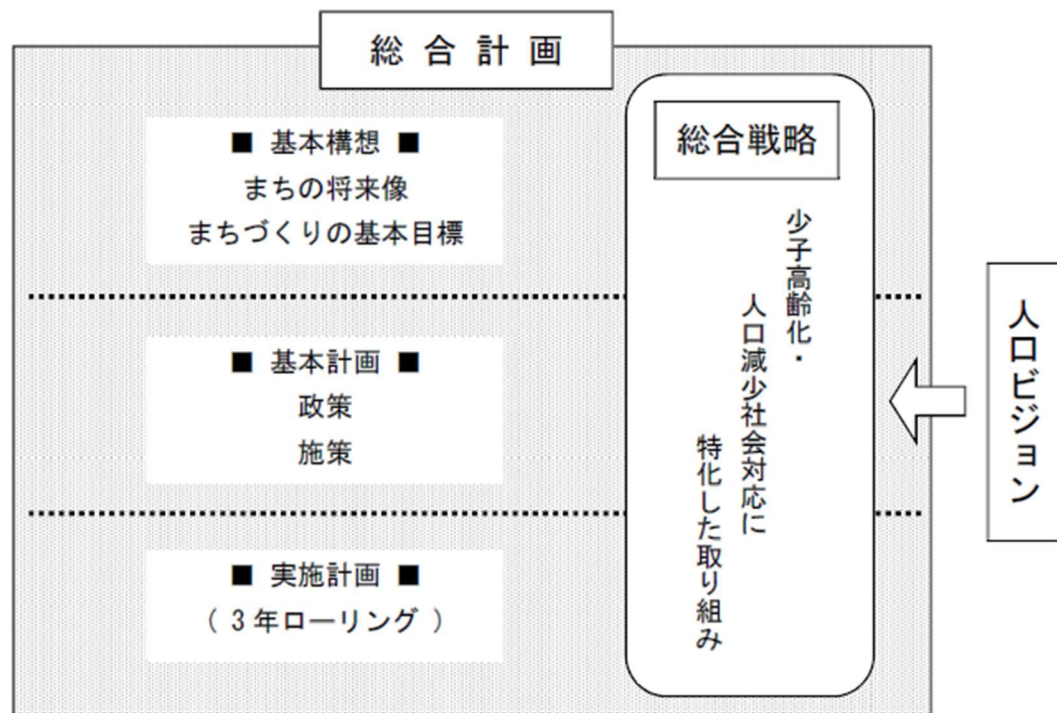


図 1-3 WBPD のプロセス

※ SCI-Japan：2019 年に設立された民間主導の非営利組織。地域幸福度（Well-Being）指標や人材育成プログラムの開発・提供などを通じて、住民のウェルビーイング向上を目標としたスマートシティ・まちづくりを推進するための産官学民連携のプラットフォーム（中間支援組織）（2025 年 4 月現在 会員数 790（うち自治体約 350））

1.3. 総合計画・総合戦略策定における活用

- ・ 津久見市の総合計画は、計画的なまちづくりを推進するための総合的な指針で、市が取り組むべき分野ごとの個別計画策定、事業実施の基本となる最上位計画であり、その内容は多岐に渡ります。
- ・ また、総合戦略は、総合計画で示されるもののなかで、特に少子高齢化、人口減少社会に対応する取組を特化して示すものです。



（出所：まち・ひと・しごと創生 第2期津久見市総合戦略）

図 1-4 津久見市総合計画と総合戦略の位置づけ

- ・ 総合計画及び総合戦略の策定にあたっては、地域の現状や課題を正確に把握し、市民の声を反映して、限られた予算を効果的に使うための計画とする必要があります。そのためには、データで現状を分析し、どの施策が効果的かを考えて優先順位を決めることが大切です。従来は経済成長や人口増加が目標でしたが、それだけでは市民の幸福感を見逃すこともあります。
- ・ そこで、デジタル庁および SCI-J が活用を推奨する、WBPD の考え方、Well-Being 指標を活用することにより、データに基づいた市民目線の総合計画・総合戦略が作ることが可能となるため、今回、総合計画・総合戦略における地域幸福度（Well-Being）指標の活用を提案するものです。

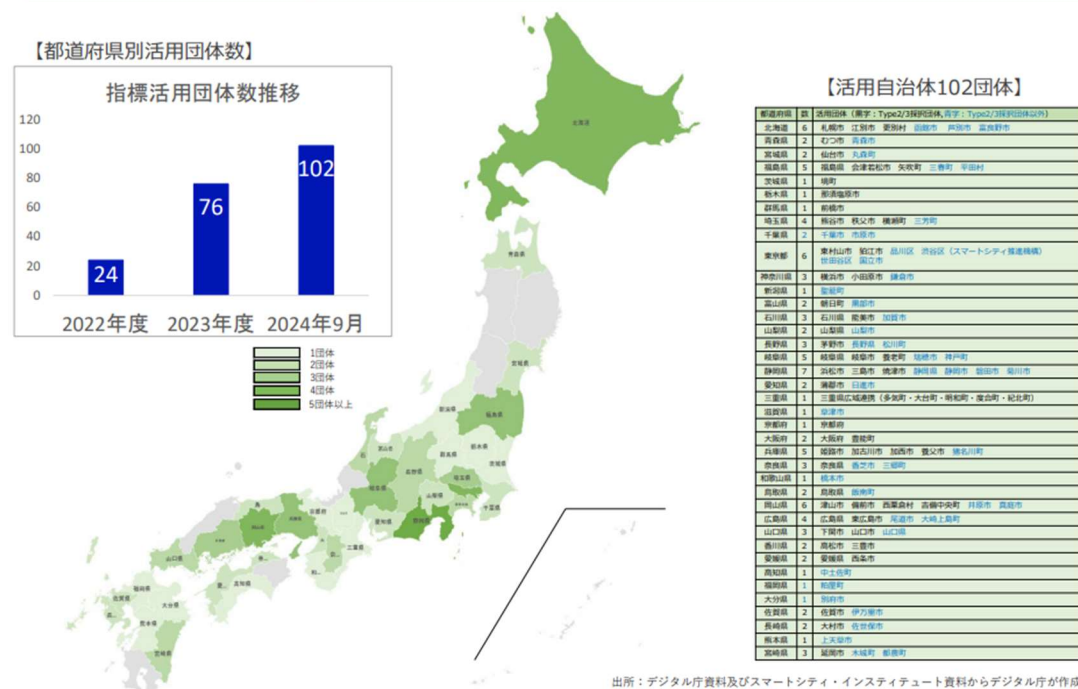
2. 地域幸福度（Well-Being）指標とは

2.1. 地域幸福度（Well-Being）指標とは

- 「**地域幸福度（Well-Being）指標**」は、デジタル庁と SCI-Japan が開発した、市民の「暮らしやすさ」や「幸福感」を数値化・可視化するツールです。
- 2024 年 9 月時点で約 100 の自治体が活用し、総合計画や総合戦略の策定、予算計画、ふるさと納税などに役立てられています。

2024 年 9 月 24 日現在

- 地域幸福度（Well-Being）指標活用団体はType2/3採択団体以外の団体にも拡大。



（出所：地方公共団体における地域幸福度（Well-Being）指標活用推進について（デジタル庁 第7回デジタル田園都市国家構想実現に向けた地域幸福度（Well-Being）指標の活用促進に関する検討会））

図 2-1 都道府県別 Well-Being 指標活用団体

2.2. 開発・導入の目的

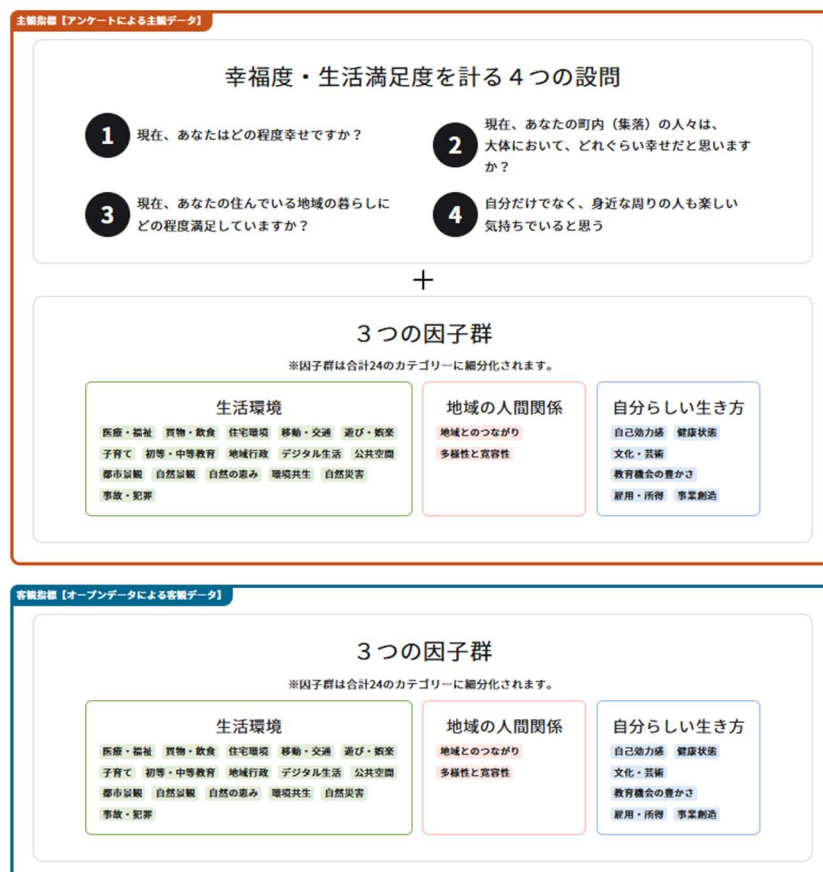
- **スマートシティ・まちづくりにおける「人間中心主義」を明確化**
 - デジタルやデータではなく、市民の幸福感（Well-being）の向上に向けてスマートシティ・街づくりを始める
- **市民の視点から「暮らしやすさ」と「幸福感（Well-being）」を数値化・可視化**
 - 行政、企業からではなく、市民の視点に立ちスマートシティが市民の暮らしやすさや幸福感に繋がっているか、を確認しながら進める
- **ランキングではなく、自治体が「個性を磨く」機会を創出**
 - 都市の個性を更に磨く気付きの材料となり、それぞれの都市の特徴をグラフの形や数値から捉えることができる
- **WHO等の国際的な枠組みを導入**
 - 世界的な基準と整合させた枠組みを導入し、日本のガラパゴス化を回避する
- **客観と主観データの両方を活用。無料でオープン化**
 - 基礎自治体毎の客観的に測定できるデータと市民の主観によるアンケートデータの両方を無料で利用できる
- **まちづくりのEBPM・ワイズスペンディングに役立てる**
 - データ(根拠)に基づいた政策立案・検証や、政策効果が乏しい歳出から政策効果の高い歳出への転換に活用できる

出典：「地域幸福度（Well-being）指標活用ガイドブック」
（2024年6月 デジタル庁・一般社団法人スマートシティ・インスティテュート）

図 2-2 地域幸福度（Well-Being）指標の開発・導入の目的

2.3. 主観指標と客観指標

- ・ 地域幸福度（Well-Being）指標は、地域における幸福度・生活満足度を計る4つの設問と、3つの因子群(生活環境・地域の人間関係・自分らしい生き方)から構成され、因子群は合計24のカテゴリーに細分化されます。
- ・ 24のカテゴリー毎に、主観指標と客観指標が設定され、主観指標ではアンケート調査から市民のウェルビーイングを、客観指標ではオープンデータから暮らしやすさを測定します。

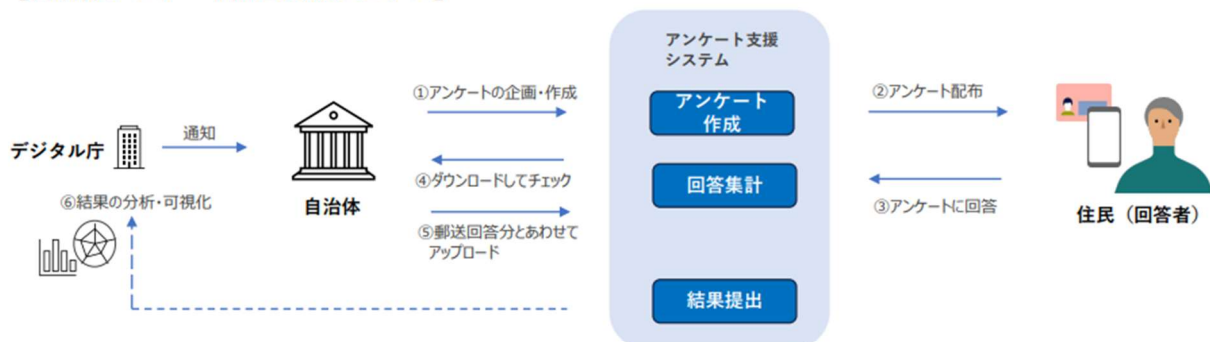


2.4. 主観指標アンケート調査と結果の可視化

- 主観指標は、令和4年度から全国調査が実施されており、令和6年度は約10万人が回答しています。（政令指定都市1,000、東京23区など400、その他自治体100を回収目標として設定。）
- 全国調査の回答者数が少ない自治体では、個別にアンケート調査を実施することが推奨されています。令和6年10月から「自治体アンケート調査支援システム」が提供されており、津久見市ではこのシステムを活用し、2025年4月に個別アンケート調査を実施しました。
- 調査結果は、地域幸福度（Well-Being）指標サイトに公開され、全国調査結果に加え、自治体の独自調査結果も無償で可視化されています。サイトには、指標活用に必要なツールや各団体の指標活用事例も掲載されており、指標を積極的に活用する自治体の分析・評価を支援してくれるものです。

<https://well-being.digital.go.jp/>

【自治体アンケート調査支援システム】



（出典：地域幸福度（Well-being）指標の活用について（2024年10月 デジタル庁 地域幸福度（Well-Being）指標活用説明会）

図 2-5 自治体アンケート調査支援システム

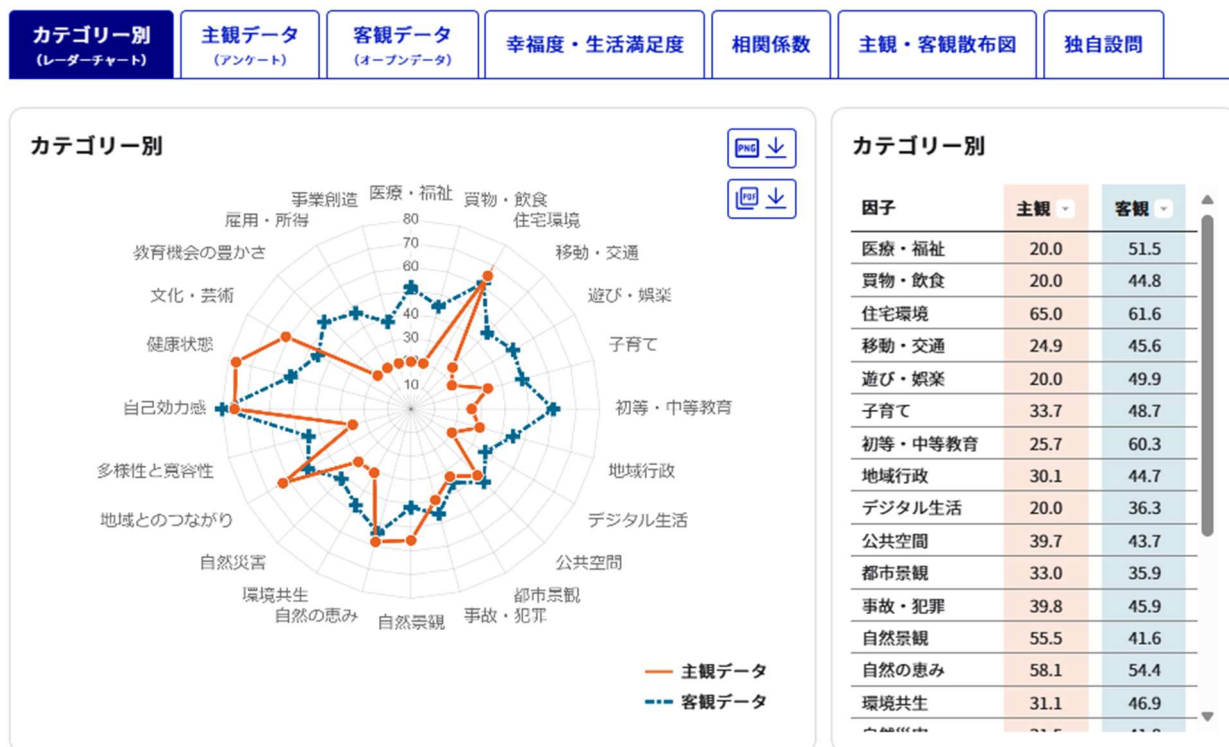


図 2-6 地域幸福度（Well-Being）指標サイト（津久見市における主観データ・客観データ）

2.5. ワークショップ

- アンケート調査結果をベースに、地域幸福度（Well-Being）指標を職員・市民と共有するワークショップを実施し、意見を幅広く収集するとともに地域の Well-Being を市民目線で評価します。
 - ✓ 職員ワークショップ：令和7年5月30日実施予定
 - ✓ 市民ワークショップ：令和7年6月8日実施予定
- データを活用した共助のまちづくりを進めるには関係者の巻き込みが重要であり、地域幸福度（Well-Being）指標を活用したワークショップはその役割を果たします。また、市民・関係者と地域の現状や課題を共有することで、まちづくりへの積極的な参画へのきっかけとします。
- ワークショップはアンケート同様、デジタル庁により標準ワークショップが提供されています。ワークショップにおいて、市民のウェルビーイングに重要な因子を見つけ出し、ウェルビーイングを高めるための重点領域、将来の都市像を考えます。この結果を、次期総合計画・総合戦略の策定に反映していく予定です。

【提供する「標準ワークショップ」概要】

項目	内容
参加対象者	①自治体職員、②地域の関係者（地元事業者・商工会・NPO・大学等）③地域の住民・学生※②③の実施は、①を実施済であること
定員	● 原則、30名程度 ● グループワークは、1グループ4～5名を推奨
実施目的	● ウェルビーイングの定義、重要性等について理解を深める ● 地域幸福度指標の構成・概要を理解し、指標サイトの使い方を習得する ● 地域幸福度指標をもとにして、対象自治体の現状について理解を深める ● 地域幸福度指標を活用した政策デザイン手法を体験する
プログラム（標準時間）	● 午前（2時間） ウェルビーイングに関する講義、地域幸福度指標ダッシュボードの操作演習 ● 午後（3時間） 地域幸福度指標を活用した政策デザインに関するグループワーク チーム発表・講評

地域幸福度（Well-Being）指標を活用したグループワークの流れ

- ①地域幸福度指標ダッシュボードを活用してまちの特徴を俯瞰する
- ②主観×客観分析を通じ、市民のウェルビーイングにとって重要な因子を見つける
- ③市民の幸福度・生活満足度と相関性の高い因子を特定する
- ④市民のウェルビーイングを高めるための重点領域を決める
- ⑤将来のウェルビーイングが向上した都市像を言語化する
- ⑥チーム発表と講評



（出典：地域幸福度（Well-being）指標の活用について（2024年10月 デジタル庁 地域幸福度（Well-Being）指標活用説明会）

図 2-7 デジタル庁 地域幸福度（Well-Being）指標を活用した標準ワークショップ

3. Well-Being アンケート調査結果

3.1. 調査概要

項 目	内 容
調 査 目 的	・ Well-Being を構成する 24 の因子について、市民の主観的な考え方を把握し、客観的評価と比較・分析することにより、次期総合計画・総合戦略策定に利用する。
調 査 時 期	令和 7 年 4 月 1 日～4 月 15 日
調 査 対 象 者	津久見市民（18 歳以上） に対して回答を呼びかけ
回 収 数	143 件
調 査 方 法	・ デジタル庁の「自治体アンケート調査支援システム」により実施（Web 調査） ・ 広報紙、公式 LINE・X・Facebook アカウント等を利用し、アンケート調査の Web サイトを案内
主な調査項目	各項目を 5 段階で回答 （あてはまる、ややあてはまる、どちらでもない、ややあてはまらない、あてはまらない） ○医療・福祉 ・ 医療機関が充実している ・ 介護、福祉施設のサービスが受けやすい ○都市景観 ・ 自慢できる都市景観がある ○地域とのつながり ・ 地域活動への市民参加が盛んである ・ 困ったときに相談できる人が身近にいる ○健康状態 ・ 身体的に健康な状態である ・ 精神的に健康な状態である など

3.2. 属性

- ・ 有効回答者数は 141 人であり、年代別では 40 代～60 代からの回答が多く、性別は男性・女性ほぼ同程度から回答を得た。

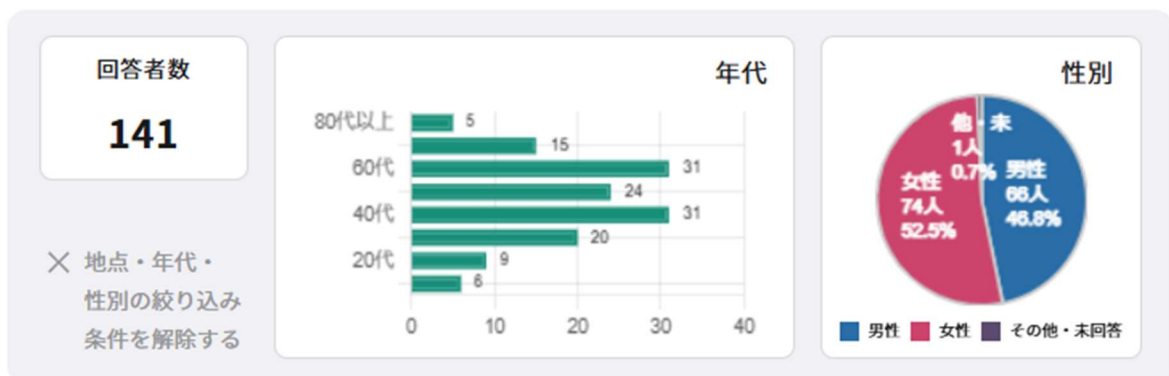
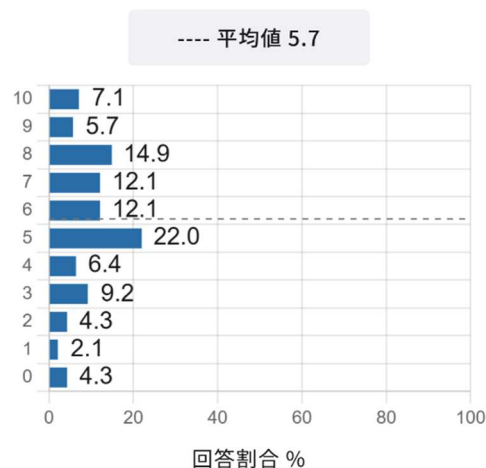
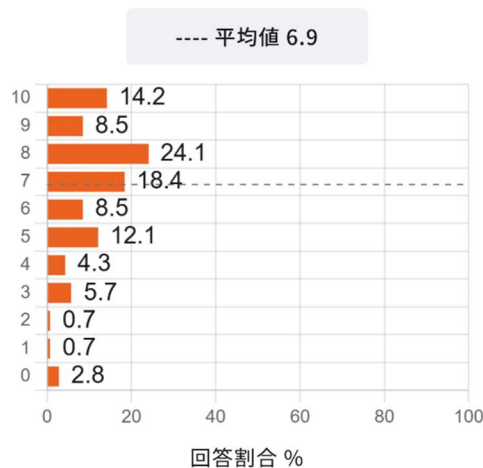


図 3-1 2025 年度（令和 7 年度）回答者属性

3.3. 幸福度・満足度

- ・ 幸福度（現在、あなたはどの程度幸せですか？）の平均値は 6.9 であった。幸福度の全国平均（2024 年度）は 6.49 であり、全国平均より幸福と感じている人が多い。
- ・ 一方、生活満足度（住んでいる地域の暮らしに満足していますか？）の平均値は 5.7 であった。生活満足度の全国平均（2024 年度）は 6.48 であり、全国平均より生活に満足している人が少ない結果となった。

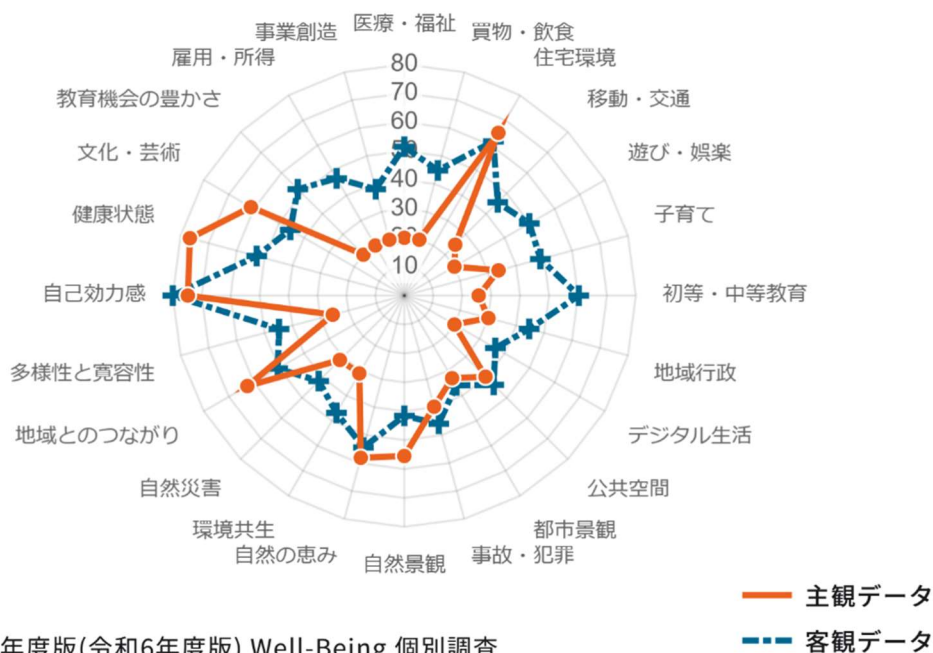


【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 3-2 幸福度

図 3-3 生活満足度

3.4. カテゴリー別（レーダーチャート・散布図）



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 3-4 カテゴリー別レーダーチャート

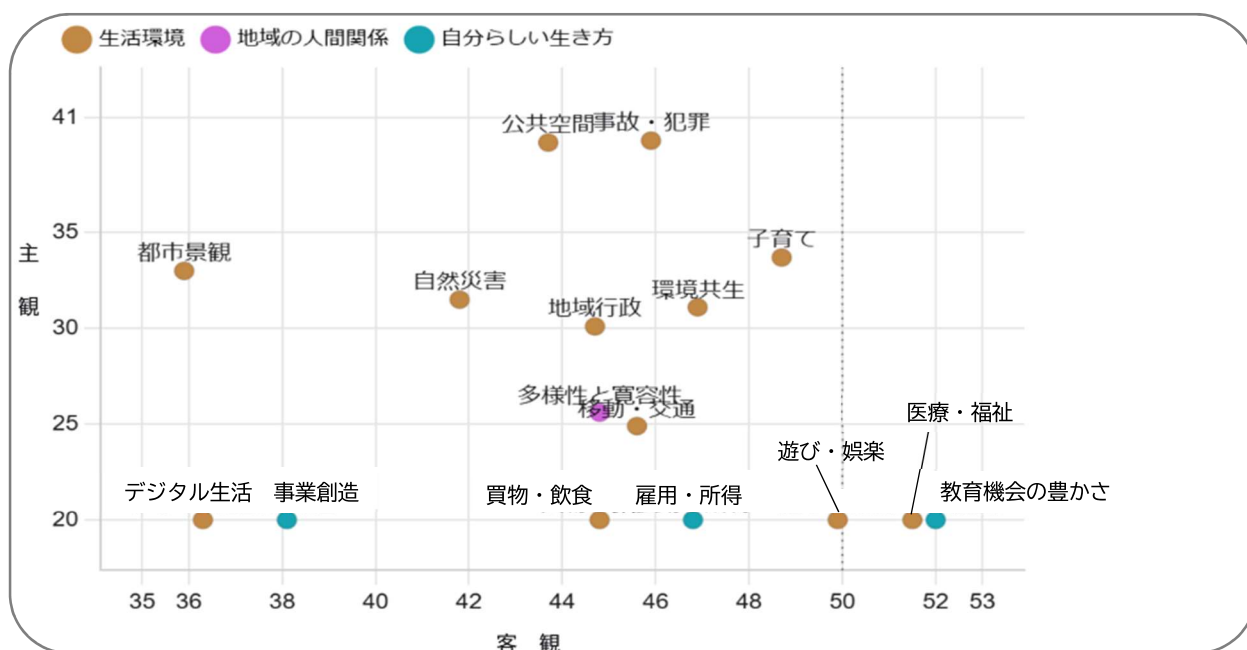
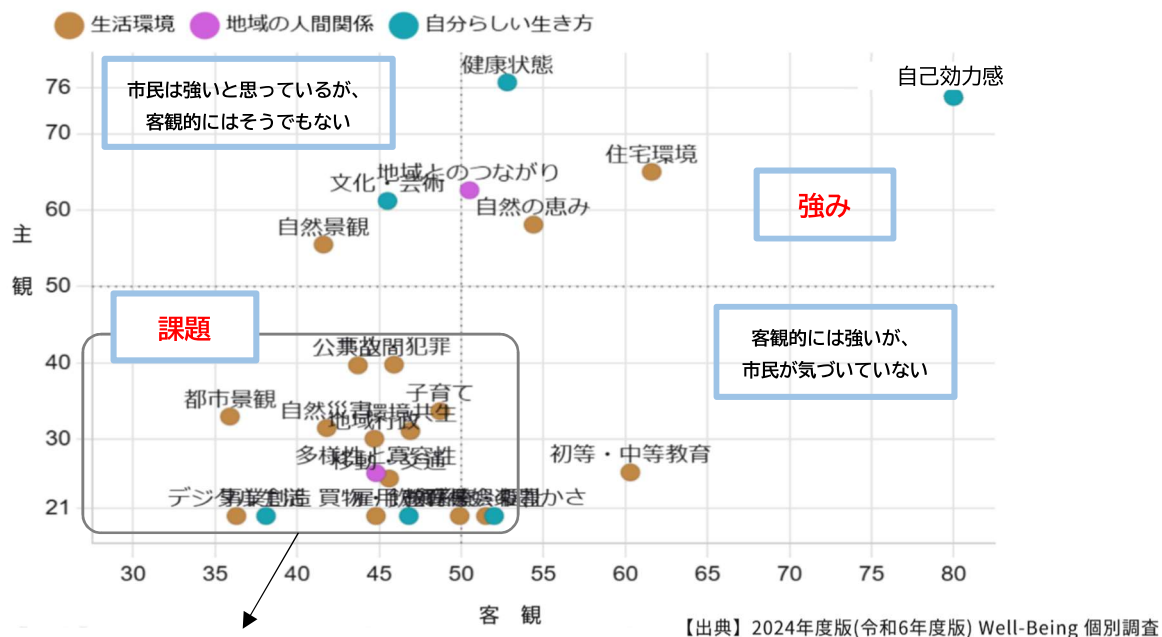


図 3-5 主観・客観散布図

(主観と客観の偏差値 50 以上 (全国平均以上))

- ・ 客観・主観ともに「住宅環境」「自然の恵み」「地域とのつながり」「健康状態」「自己効力感」の偏差値が 50 以上であり、津久見市の強みと考えられる。

(主観 50 以上、客観 50 未満)

- ・ 「自然景観」「文化・芸術」は、市民は強いと思っているが、客観データには表れていない。
- ・ これは「住民は強いと思っている（主観）が客観的にはそうでもない」という解釈ではなく、客観データ（自然景観指数：国立公園等の有無・重要文化的景観など）が実態を十分に表していると言えないケースに該当すると考えられる。

(主観 50 未満、客観 50 以上)

- ・ 「初等・中等教育」の客観の偏差値は高い (60.3) が、主観が低く (25.7) ギャップが大きい。
- ・ 「医療・福祉」「教育機会の豊かさ」についても、客観的には偏差値 50 を超えており低くはないが、主観が 20 と市民の評価が非常に低い。

(主観と客観の偏差値 50 未満 (全国平均未満))

- ・ 客観 50 未満、かつ最小値である 20 の偏差値となっている主観の因子が多く (「買物・飲食」「遊び・娯楽」「デジタル生活」「雇用・所得」「事業創造」)、津久見市の課題と考えられる範囲に因子が多く集まる結果となった。

3.5. 幸福度・生活満足度と因子との相関関係

- ・ 幸福度および生活満足度それぞれと、主観の 24 の因子において、ある程度相関があると言える 0.4 以上の因子は、10 因子であった。(「住宅環境」「子育て」「初等・中等教育」「地域行政」「公共空間」「自然景観」「自然の恵み」「地域とのつながり」「自己効力感」「文化・芸術」)
- ・ 全国的には、「公共空間」「教育の豊かさ」「事故・犯罪」「地域行政」の 4 因子が、幸福度・生活満足度と相関性が高い因子となっているが、津久見市では「公共空間」「地域行政」は相関性が高かった一方、「教育機会の豊かさ」「事故・犯罪」は相関性が低い結果となった。

※ 相関係数

相関係数とは、2つのデータの間の「関係性の強さ」を表す値で、-1 から 1 の間の値で表現される。0 から離れている方がより強い相関関係を意味する。

<相関係数の目安 (正の相関の時)>

0.7 以上：相関が非常に強い／0.4～0.7：相関が強い／0.4 未満：相関が弱い

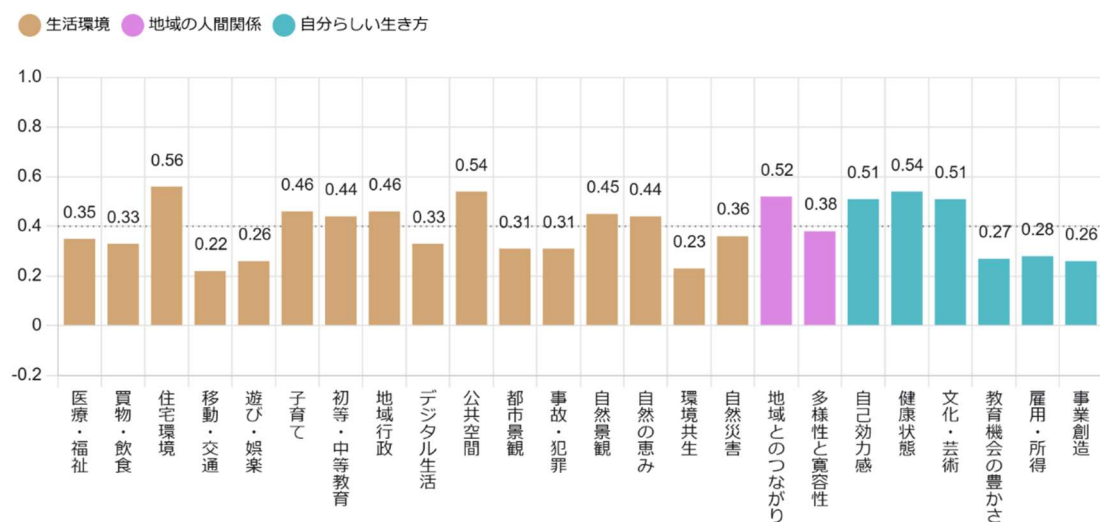


図 3-6 幸福度と因子との相関関係

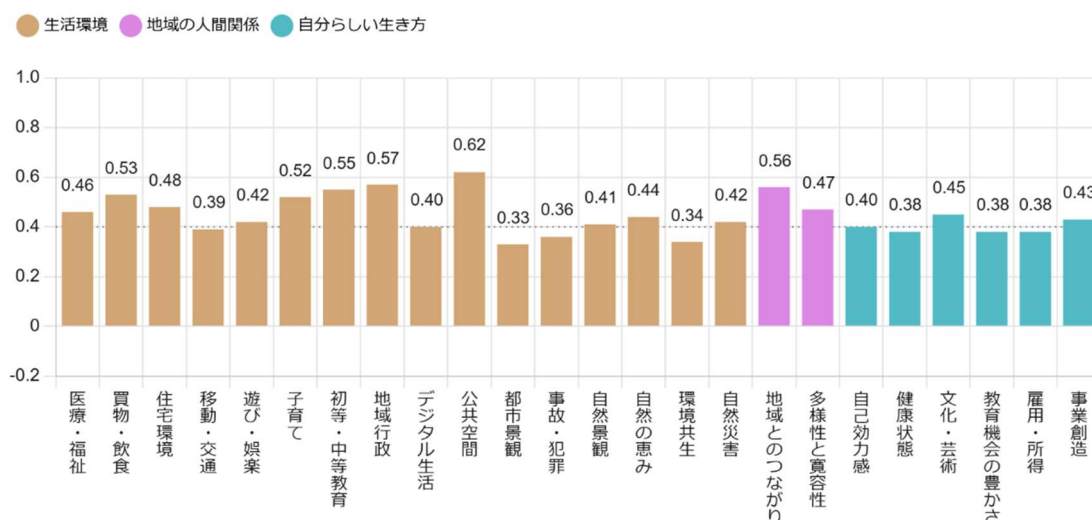


図 3-7 生活満足度と因子との相関関係

幸福度、生活満足度、町内の幸福度に相関性の高い主観因子トップ10。共通項は、公共空間、教育機会の豊かさ、事故・犯罪、地域行政の4因子（下線）

【幸福度】

- 健康状態*
- 自己効力感*
- 公共空間*
- 文化・芸術
- 地域とのつながり*
- 教育機会の豊かさ
- 事故・犯罪
- 多様性・寛容性
- 地域行政
- 都市景観

【生活満足度】

- 公共空間*
- 地域行政*
- 教育機会の豊かさ
- 事故・犯罪
- 事業創造
- 雇用・所得*
- 初等・中等教育
- デジタル生活
- 子育て
- 医療・福祉*

【町内の幸福度】

- 公共空間*
- 教育機会の豊かさ
- 事故・犯罪
- 文化・芸術
- 多様性・寛容性
- 子育て
- 地域行政
- 自己効力感*
- 事業創造
- 初等・中等教育

都市環境の設問
自然環境の設問
地域の人間関係の設問
自分らしい生き方の設問
(* 重回帰分析で抽出できた因子)

(出所：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート)

図 3-8 全国 幸福度・生活満足度と相関性の高い主観因子